

E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題

伊原木 大祐

はじめに

E・レヴィナスの哲学思想において「エロスの現象学」という言葉は、狭義には、その著作『全体性と無限——外部性についての試論』（1961）の第四部「顔の彼方へ」の内部に置かれたB節のタイトルを指している。本稿では、この節を中心として第四部の思想全体に表れた二元性の問題を考察する¹。以下で提示される仮説をあらかじめ先取りしておくならば、それは次のようなものとなろう。解釈困難であるがゆえに長らく謎めいたものと見なされてきた「第四部」が担う真の意義は、それまでの論述において避けがたいものとなった二項間の断絶を修復し、代償することにある。しかもそれは、二元性のたんなる一元化や総合ではなく、この二元を二元のまま保持しつつ繋ぎあわせるような修復の過程である。『全体性と無限』の第二部と第三部、すなわち、この書の術語体系に即して言うならば「内部性」と「外部性」、「欲求」と「欲望」、「自我」と「他者」、「生」と「顔」、「享受」と「倫理」といったものの両義的連関づけこそが、第四部の根本動因なのである。別の見方をするなら、「ある (il y a)」の概念を始点とする前期までのレヴィナス思想に顕著であったグノーシス的傾向に対して、いわばユダヤ教の伝統的立場から示される保守的ともいえる防衛反応の残滓が、そこには認められる。

考察を始めるにあたって、若干の予備的な指摘をしておきたい。第四部のB節で提起された諸説は、その象徴的イメージに富んだ語り口、未規定な概念の多用といった理由から、「経験の貧困化²」に毒された空虚な記述であるかのような印象を与

¹ 本稿の中で『全体性と無限——外部性についての試論』（『全体性と無限』と略記）を引用する場合には、カッコ内に原文ポケット版 (Emmanuel Levinas, *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, Paris: Le livre de poche, 1996) のページ数のみを記した。本論文の引用において下線部で記された文章は、すべて原文イタリックの強調箇所である。

² Dominique Janicaud, *Le tournant théologique de la phénoménologie française*, Paris: L'Éclat, 1990, p. 30.

えてきた。また同じ理由から、そこにかえて過剰な意味を読み込むことも許されてきた（ここで筆者が念頭に置いているのは、レヴィナスによるエロス論を「約束の脱構築」という——それ自体としては興味深い——問いに繋げる J・デリダの解釈³である）。しかしながら、この手の解釈はいずれも、C 節以降で論じられる生殖の問題を切り捨ててしまう点で共通している⁴。そもそも、レヴィナスの「エロス」論を子の産出という現象から切り離して、部分的に独立した性愛論として読み込むことには無理があるのではないか。もちろん、ここでいうエロス論とは、後続の生殖論からある程度まで区別される箇所のことを指している。A・シュネルによる『全体性と無限』への注釈書⁵は、第 10 章を「エロス」、第 11 章を「繁殖性」と題し、二つの「カテゴリー」を明確に区別した上で順に解釈を試みている。類似の区別は、レヴィナス自身が『時間と他者』の第四講で示した記述の流れに沿ったものであるばかりでなく、『全体性と無限』第四部の B「エロスの現象学」に続いて別枠で C「繁殖性」が置かれていることから、さしあたり首肯できるものだろう。けれども、この区別によって二つの内容が独立した形で別個に並置されているとは言いがたく、両者はむしろ内容上密接に結合している。節の分離はむしろ便宜的なものにすぎないというのが真相であろう。以下では、あえて前方の節から順番に読み解くことで、このことを証示してみたい⁶。

³ Cf. Jacques Derrida, *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Paris: Galilée, 2000, pp. 94-99.

⁴ この意味において、適切にもエロス論を「繁殖性」という概念の側から捉え返している以下の論考は、むしろ例外をなしていると言えよう。ジャン＝ミシェル・サランスキ「『全体性と無限』の諸地平」『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』（合田正人編）、知泉書館、2014 年、3-31 頁参照。無論、わが国での先行研究もその点で遜色がない。小泉義之『レヴィナス——何のために生きるのか』、NHK出版、2003 年、および檜垣立哉『子供の哲学——産まれるものとしての身体』、講談社選書メチエ、2012 年、121-157 頁（第 4 章）を参照。

⁵ Alexander Schnell, *En face de l'extériorité. Levinas et la question de la subjectivité*, Paris: Vrin, 2010.

⁶ 本稿は、2011 年 11 月に開催された日本現象学会第 33 回研究発表大会におけるワークショップ「レヴィナス『全体性と無限』とエロスの現象学——『全体性と無限』刊行 50 周年を記念して」の枠組みで口頭発表した原稿を根本的に改めて論文にしたものである。上記ワークショップの作業過程で有益な指摘・助言を与えてくれた小手川正二郎（國學院大學）、檜垣立哉（大阪大学）、関根小織（青山学院大学）の三氏に感謝申し上げる。また、この作業はすべて J S P S 科研費（課題番号 22720010 および 25770010）の助成を受けたものである。

1. 探求する愛撫

B節を読み解く際の鍵になるのは、「愛撫」という概念である。一般に、愛撫という行為には何かに触れることが含まれる。レヴィナスはまず、そうした「接触としての愛撫」を「感性 (sensibilité)」(288) のレベルに位置づける。『全体性と無限』の用語法では、この「感性」が「享受である」(144) と定義されていた⁷。享受とは、身体的欲求に衝き動かされた自我が世界の諸対象を糧としながら自我中心的に満足する様式のことである。それゆえ愛撫は、形而上学的な「欲望」に對置された「欲求」の孤立的・自足的運動を内包する。とはいえ、愛撫は誰かへの愛撫である以上、やはり「〈他人〉 (Autrui)」と関わる。この場合の〈他人〉は、愛の対象であるがゆえに「愛される者」であるが、レヴィナスはこれを「〈愛される女〉 (Aimée)」(286) と呼んだ。エロスの主体の相手は「女性的なもの」として措定される。いずれにせよ、本来は感性=享受のレベルを超えているはずの対象——〈他人〉——がなおも「享受」されてしまう点に、愛の両義性がある。B節に先立つA「愛の両義性」においてレヴィナスは、「〈他人〉がその他性を保持しながらも欲求の対象として現れる可能性」、つまり「〈他人〉を享受する可能性」という「この欲求と欲望の同時性」こそが、曖昧さという「エロスのなもの独自性」(285) をなすのだと述べている。以上のようなエロス論の基本構図を確認したところで、『全体性と無限』独自の愛撫観を記した重要な一節を引用しておく。

「愛撫とは、何も把持しない (ne se saisir de rien) ことにある。それは、たえず自らの形から未来——けっして十分に未来ではない未来——へと逃れるものを請い求めること、いまだ存在しないかのように遠ざかるものを請い求めることにある。愛撫は探し求め、掘り返す。愛撫とは、開示の志向性ではなく、探求の志向性であり、見えないものへの歩みなのである」(288)。

これによると、愛撫とは何かを把持する運動ではなく、「探し求める (chercher)」ものだとレヴィナスは言う。そのために愛撫は「探求の志向性」と呼ばれるのだが、

⁷ 『時間と他者』では「接触」が感性ではなく、「感覚 (sensation)」と同一視されている。しかし、それが享受と等しいことには変わりはない。「いかなる享受も存在様式であり、さらには感覚 (……) でもある」(E. Levinas, *Le temps et l'autre*, Paris: Quadrige/PUF, 1998, p. 46) ため、「感覚としての接触」は「光の世界」(これは享受の段階を意味する)に「属する」(ibid., p. 82) と考えられている。

では、その場合の志向的对象は何なのだろうか。引用文から推測するかぎり、愛撫の求める先はどうか「見えないもの」であるらしい。この数行下の文章では、愛撫が「いまだ存在しないもの、ある『無以下のもの (moins que rien)』」を「探し求める」(288)とされている。

ならば、そこで併置された「いまだ存在しないもの」、「無以下のもの」とは何を意味するのか。レヴィナスによると、それは「未来の彼方に閉ざされて眠り込んでおり、そうであるがゆえに、予期に供されるような可能なものとはまったく違う仕方で眠り込んでいる」(288)という。ここから二つの論点を引き出すことができる。第一に、この「無以下のもの」はただ存在しないというのではなく、いまだ存在しないものでもある以上、何らかの未来と関わる。ただし、それは一般的な未来と異なる未来⁸、すなわち「未来の彼方」に潜伏するものと考えられている。第二に、「無以下のもの」は特殊な潜在性の形式をまとっていることが分かる。レヴィナスがエロス論の文脈で頻繁に用いる「可能なもの (le possible)」とは、予期や投企といった形式のもとに把持可能な未来の対象を指している。つまり、私の権能〔私ができること〕(mon pouvoir)の範囲内にあるような可能性のことである。一般的な未来は、そのようにして掴むことのできる諸可能性に満ちた未来、レヴィナスの表現を借りると「複数の可能事 (des possibles) がそこで輝いているような未来」(292)なのである。だが、愛撫によって探求される「無以下のもの」は、そうした一般的な未来の領域を超え出る。愛撫は「可能事を把持するのではない」(290)。性愛の運動はむしろ「可能なものの彼方に赴く」(292)。

この議論で鍵となる「無以下のもの」の正体がそれとなく明かされるのは、ようやくB節の最終段落においてである。レヴィナスは『全体性と無限』の中で初めて「子との関係」(298)に言及した一文の直後、以下のようにB節を締め括り、次節への架け橋としている。「われわれはここで新たなカテゴリーを前にしている。存在の扉の背後にあるもの、無以下のものを前にしているのだ。無以下のものは、エロスによってその消極的性格を取り去られ、冒瀆される。問題となるのは、不安の虚無とは異なる虚無である。それは、無以下のものの秘密のうちに包み隠された未

⁸ こうした未来について、『時間と他者』は「純粋な未来 (avenir pur)」(E. Levinas, *op. cit.*, pp. 82- 83)、『全体性と無限』は「けっして十分に未来ではない未来 (futur jamais assez futur, avenir jamais assez avenir)」(285)や「絶対的な未来 (avenir absolu, futur absolu)」(300, 304)などと呼んでいる。

来という虚無なのである」(299)。

文脈からして、この新たなカテゴリーに「子との関係」が絡んでくることは言うまでもない。ここで愛撫が探し求める「無以下のもの=取るに足りないもの (moins que rien)」とは、エロスの行為によって産出されるべき子の位相を間接的に予告した術語ではないのか⁹。まずは上記引用の「冒瀆」という語に注意を喚起したい。C節冒頭でレヴィナスは、まさにこの冒瀆が「子を発見する」(299)のだと明言している。冒瀆はすでに「秘められたものと暴露されたものの同時性」(287)であると定義されていた。エロス固有の曖昧さゆえに、冒瀆は「隠れたものを隠れたものとして」(291)、あくまで秘密の次元を保ったまま露わにする。ここでの「隠れたもの (le caché)」は別の箇所(296)で「いまだ存在しないもの」と同義的に用いられているし、先の引用文では「秘密」という語が「無以下のもの」と連結していた。そうである以上、「隠れたもの」や「秘密」といったエロスの秘匿性を示す一連の語もまた、「女性的なもの」の深部に埋もれた子の契機と密接な関係をもつと考えられる¹⁰。加えて、引用文中の「未来」という語にも着目すべきだろう。いまだ存在しない「無以下のもの」が、通常未来とは区別された未来的位相——「未来の彼方」——に潜んでいることはすでに見た。C節ではこの特殊な時間性がまさに「子の未来」という言葉で示されている。「ところで、可能なものの彼方から、投企の彼方から子の未来が生じるためには、女性的なものである〈他人〉との出会いが必要である。(……) 諸々の可能事に対する権能には還元できない、このような未来との関係をわれわれは繁殖性 (fécondité) と呼ぶ」(299-300)。

さて、今こそ生殖の視点から遡って、愛撫の記述を見直すべきである。結局のところ、この愛撫が「女性的なもの」との交渉を介して探し求める位相は、子という未来、あるいは子として成就する私の未来に密着している。けれども、純然たるエロスの段階では、その求める先が当然まだ「子」としては実体化ないし超実体化されていない。それゆえ、この時点では「愛撫は自らが何を探し求めているのか知ら

⁹ Cf. Jean-Luc Thyse, *Eros et fécondité chez le jeune Levinas*, Paris: L'Harmattan, 1998, pp. 111-117; A. Schnell, *op. cit.*, pp. 153-154.

¹⁰ たとえばC・シャリエは、「女性的な秘匿性 (clandestinité féminine)」が「子」という未来についての「知」でもあると述べる。Cf. Catherine Chalier, *Figures du féminin. Lecture d'Emmanuel Levinas*, Paris: Des femmes-Antoinette Fouque, 2006, p. 27. ただし、彼女は「無以下のもの」を女性性そのものと見なしているようである。「愛される女」は「愛する女としては『取るに足りないもの』」(ibid., p. 31)であるという理解は一考に値する。

ない¹¹。絶対的未來に潜伏するものは、樫の木にとってのドングリののようにやがては完全な存在として現実化すべき可能態、すなわち「存在以下のもの」でさえない。それは、文字通りまだ胚胎さえしていない「女性的なもの」の他性において開かれる特殊な（不）可能性として、「私自身の可能性でもあれば、〈他者〉の可能性、〈愛される女〉の可能性でもある」（300）ような重層的（不）可能性として深層に埋もれている。したがって、この出来事は、私一人の孤独な権能によって先駆的に把持できるような「可能事」としての性格を超えている（このテーゼには言うまでもなく、ハイデガー哲学への挑戦的意図が反響している）。性的他者との結合を通じて産出された子との関係は、他者へと超越しながらもなおその中で「私」が消失しない真の超越を、「私は私の子である」（310）という形で成就する。

ところで、この超越を準備するエロスの関係の実態はどうなっているのだろうか。愛撫の求める先が究極的には子の未来であるとしても、その通過点として〈愛される女〉の領分と関わることは避けられない¹²。B節冒頭では〈愛される女〉が「柔和な (tendre)」という形容詞によって特徴づけられていたが、愛撫はまさにこの「柔和なものを目指す」（290）とも言われる。柔和の様式に含意されているのは、性愛の対象が「弱さ」、「極度の脆さ」、「傷つきやすさ」（286）といった脆弱な受動的様態を帯びる点である。このような性的他者の特質は他にも、その消失性を暗示する種々の単語——「消える (se dissiper, s'êteindre)」・「死ぬ (mourir)」・「気絶する (se pâmer)」・「はかなさ (évanescence)」・「死すべき (mortel)」・「気絶 (pâmoison)」等々——によって記されている。愛する主体が性的他者との関係に入るとき、おそらくそこで魅惑の対象となるのは、何よりも他者の相対的に《か弱い》性格であり、さらにはこの主体にのしかかる死や責任の重みを一時的に忘却させてくれるような非言語的で享樂的な性質、つまり、「無責任な動物性」ないし「幼児性」（295）なのである。しかしながら、本稿では、そうした性的他者の様態がもつ意義ではなく、その性的他者との間で主体が取り結ぶ相関関係の意義に論点を絞っておこう。このような関係性に対する考察は、「官能」の記述においていっそう明確化されている。

¹¹ E. Levinas, *Le temps et l'autre*, op. cit., p. 82.

¹² このように《愛撫の探求先》と《探求の場所》を区別して考えるというアイデアは、テーゼの研究に負っている。そこでは後者の領域が「土壌 (terrain)」や「名をもたない『場 (lieu)』」といった独自の術語によって表されていた (cf. J.-L. Thaysse, op. cit., pp. 80, 115)。レヴィナス自身は、こうした愛撫の実質的相関項を「柔和なもの (le tendre)」、「肉のなもの (le charnel)」(289-290) などと呼んでいる。

2. 官能の二元性

レヴィナスによるエロス論の主眼は当初、「融合」としての性愛という古典的観念を覆すことにあった。早くも捕囚期のメモ(手帳7)には以下のような断片がある。「愛。高揚は、いわゆる『二存在の融合』によるものではない。反対である。それは他人の現前によって、他人を貫通できないことの痛烈な意識によって刺激される¹³。『時間と他者』の第四講で素描された「官能の現象学」は、さらに踏み込んで、「エロスのなものにおけるいっさいの融合の欠如¹⁴」を示唆する。融合を求めつつ融合をなしえない性愛独自の悲痛は、「存在間の乗り越えがたい二元性¹⁵」に根ざしている。これとよく似た視点は『全体性と無限』の中にも確認できる。それによると、セクシュアリティを通じた関係には「なんら脱自的な〔恍惚とした〕ものがない (rien d'extatique)」(309)。というのも、「官能の悲壮さは二元性から作られているからである」(309)。この二元性をレヴィナスに沿って考察する前に、エロスの二元の緊張について精緻な議論を展開しているM・アンリの説を対比的に導入してみたい。

(1) 欲望の挫折——アンリによるエロティスム

アンリ現象学の背景には、「現れることの二重性」と呼ばれる独自の二元論的現象概念がある。一般に想定されるのは、見える仕方で現れる現象様式である。すなわち、諸事物が「世界」の外部地平において脱自的に自らを示す現れ方である。これに対してアンリが尊重するのは、見えない仕方で現れる現象様式——何らの脱自もなく情感的な「生」が直接かつ内的に自己を顕現させる現れ方である。こうした現象の二重性(世界/生)は身体概念の二重性としても解釈される¹⁶。一方に、他の諸事物と並んで外に現出している内世界的な客観的身体、すなわち「対象身体

¹³ E. Levinas, *Œuvres I: Carnets de captivité et autres inédits*, Paris: Grasset / IMEC, 2009, p. 171. 捕囚期のメモを中心に「二元性」の問題に取り組んだ重要な論考として、以下のものがある。Cf. Gérard Bensussan, « Fécondité d'Eros. Équivoque et dualité », in *Lire Totalité et Infini d'Emmanuel Levinas. Études et interprétations*, Paris: Hermann, 2011, pp. 91-106.

¹⁴ E. Levinas, *Le temps et l'autre*, op. cit., p. 82.

¹⁵ *Ibid.*, p. 78.

¹⁶ Cf. Michel Henry, *C'est moi la vérité. Pour une philosophie du christianisme*, Paris: Seuil, 1996, pp. 244-245; *Incarnation. Une philosophie de la chair*, Paris: Seuil, 2000, pp. 216-217.

(corps-objet)」がある。他方には、内側から非脱自的かつパトスの的に自己自身を体験する主観的身体、そこから私自身の力能が行使され展開されるアプリオリな可能性(「私はできる」)をはらんだ「生ける身体 (corps vivant)」が認められる。

さらにアンリは2000年の著作『受肉』の中で、メヌ・ド・ビランにヒントを得ながら、この身体概念を以下のように細分化している¹⁷。

(a) まずは先述の「生ける身体」。正確に言い直すと、情感的な生において保証される諸力能を包括した内的身体の存在。『受肉』では「根源的肉」、「根源的身体性」などと呼ばれるもの。

(b) こうした肉の努力に対して連続的に抵抗しつつも、その内的圧力に屈しているため(いわゆる「相対的抵抗」)、私が自由に動かすことのできる「有機的身体」。

(c) 内的圧力の限界において「物的身体」と化してしまうような有機的身体の存在。この物的身体とは、やはり見えないまま内部から覚知されているが、もはやそれ以上動かせず、物体のような絶対的抵抗性をもつに至った固有身体を意味する。

(d) 最後に、「もはや肉の圧力においてありのままに体験されるのではなく、外から世界のうちに自らを示す、この同じ物的身体」。

以上(a)～(c)は目に見えない内在領域にあり、(d)のみが見えるものとして内世界的に現出する。アンリによる議論の独自性は、以上の理解を踏まえた上で、男女のエロスの関係を何よりもまず、一切の超越を排した内在において記述しようとした点にある。そうした性愛の内在的次元は「恋人たちの夜」と呼ばれる。すなわち、上記(d)の物的身体＝客観的身体がもつ外在性をいったん遮断し、身体の現出をすべて内在圏域へと還元した後で性的接触の分析を試みるのである。そこで持ち出される例は、ダンスホールの喧騒を逃れてバルコニーで出会う男女のやりとりである。男が欄干の上に置かれた女の手をつかみ、その手に圧迫を及ぼすでしょう。この圧迫は男の生にとって何を意味するだろうか。それは、「自分自身の有機的身体であるような抵抗する連続体が(……)見えない物的身体となる限界にまで、この連続体を展開すること¹⁸」を意味する。男はその圧迫する努力の限界において、もはやそれ以上は自由に動かすことのできない自分自身の物的身体を、目に見えない内的抵抗として感じ取る。

¹⁷ Cf. M. Henry, *Incarnation, op. cit.*, p. 232.

¹⁸ *Ibid.*, p. 301.

これに対し、今度は女の方が手の運動を通じて男に圧迫を返すとすれば、そこでは何が起きているのか。男からすれば、この対抗運動の圧迫は、やはり自分自身の見えない物的身体という限界においてしか感じられない。したがって、手を握り返された男は、まさにそのとき女が女自身の生の中で感じ取っている運動を、そのままに体験することはできない。「愛撫¹⁹」をはじめとする性的行為においては、こうした限界体験が顕著に現れる。「交尾において二つの欲動は共鳴し始め、それぞれの欲動が自己を展開し、交互に譲り合う。(……) 能動的様態と受動的様態の入れ替わりの中で各欲動が知るの、自分自身でしかなく、自分自身の運動、および自分自身の見えない有機的身体の限界において感じ取られた感覚でしかない²⁰」。

その結果、この「恋人たちの夜」にロマンティックな一体化や融合体験は実在しえず、「欲望の二つの流れ」は「分離されたままにとどまる²¹」。ときに快樂の一致と見られる状態も、二つの自己がたまたま近接した瞬間にオーガズムに達したという程度の合致にすぎず、それらの実在的同一化を意味するものではない。それゆえ、一方にとって他方は「両者を永久に隔てる壁の向こう側」でありつづける。これが「欲動的対化 (accouplement pulsionnel)²²」の現象である。レヴィナスが指摘した〈愛される女〉の犯しがたい「処女性」(289)の背後には、ひょっとすると、こうした対化が作動しているのかもしれない。もしもアンリの考えるように、性的欲望を招来したそもそもの原因が、他者身体の内世界的な現出の裏に隠された「生」であったとすれば、この欲望の真の目的は、その内側の見えない生に達し、その生の只中で他者の快樂に合流することであろう。けれども、他者の生を目指す狂おしいエロスの欲望は、両者を隔てる内在的な壁ゆえに挫折を余儀なくされる。これが、『受肉』において描き出された「欲望の挫折 (échec du désir)」という現象である。

しかし、このような挫折は、「内在への還元」という初期の設定がもたらした挫折ではないのか。欲望に駆られた私が触れようとしていたのは、見えない夜における壁ではなく、世界の光に照らし出された眼前の裸体ではないのか。愛撫されるのは、世界内に現象したこの髪、この唇、この手足ではないのか。たしかに、エロス

¹⁹ アンリにおいても「愛撫」は「エロスの関係において (……) 重要な役割を果たす」ものであり、「特権的な実例」である (*ibid.*, p. 299)。

²⁰ *Ibid.*, pp. 301-302.

²¹ *Ibid.*, p. 302.

²² *Ibid.*, p. 304. Cf. Michel Henry, *Phénoménologie matérielle*, Paris: PUF, 1990, p. 176.

とはそうしたものであるにちがいない。だが、アンリはそこに「挫折の反復」を見る。なぜなら、エロスの運動は、このように客観的身体——すなわち、一定の「性」として外に展示された物体——を媒介とした場合には、なおさら他者の生ける肉へと嵌入することはできないからである。手による愛撫がいくら恋人の裸を探っても、その表層に恋人の「生」は実在しない。ここにおいて欲望の挫折は超克されるどころか、反復され、倍化される一方なのである。

(2) 感じることの同一性——レヴィナスによる官能

性愛を通じた関係に「挫折」を見たアンリに対して、レヴィナスの場合はどうだろうか²³。なるほど、レヴィナスもまた、エロスにおける融合不可能な二元性を重視する。しかし、一貫して融合を排除していた『時間と他者』に対し、『全体性と無限』では、「愛する者と愛される女との一致 (coïncidence)」である官能に「融合」(302)の一面があることを指摘している。ここで新たに取り出された一致や融合の面に着目したい。これを理解する手がかりは、恋人たちの中で築かれる極度に内密な関係性でもある「官能の非社会性」にある。そうした非社会性のことをレヴィナスは「感じるものと感じられるものの共同体」(297)と呼ぶ。そして、この共同体＝共通性は「感じることの類似 (analogie du sentir)」(297)によるのではなく、「感じることの同一性 (identité du sentir)」(297)に起因するという。1950年の講演原稿「教え」では、同じ現象が「双頭感覚 (sensation bicéphale)」という概念のもとに理解されていた。それは「二つの似通った感覚ということではなくて、二つの存在によって感得される唯一独自の感覚のようなものであり、しかもこれら二つの自我の間に混同が起こらない²⁴」感覚なのである。レヴィナスにとって「官能の鋭さ」は、アン

²³ 『時間と他者』ではその「挫折」がきっぱりと否定されている。「〈エロス〉による他者との関係を挫折 (échec) として特徴づけることができるだろうか。よくある記述の語彙を取り入れるのであれば、つまり、『把持する』こと、『所有する』こと、『認識する』ことによってエロスのなものを特徴づけたいのであれば、またしても答えは然りである。[だが実際は]エロスの中にそうしたこと [上記三つの行為] はまったくないし、そうしたことについての挫折もない」(E. Levinas, *Le temps et l'autre*, op. cit., p. 83)。

²⁴ E. Levinas, *Œuvres 2: Parole et Silence et autres conférences inédites au Collège philosophique*, Paris: Grasset / IMEC, 2011, p. 192. また1957年のノートでは、双頭感覚そのものが「息子の懐胎」として理解されている。「エロス——二元性。／双頭感覚——この意味ですすでに息子——だが、実際には息子の懐胎にすぎない」(E. Levinas, *Œuvres 1*, op. cit., p. 391)。

りのようにただ二つの欲動の融合不可能性（「壁」）にのみ由来するのではなく、二者が感覚面で一致しながらそれでもなお「分離」しているという事実に基づく。

この「同一性」の意味をもっと掘り下げてみよう。アンリの視点からすれば、こうした感覚的同一性の仮定はにわかには信じがたいものである。もちろんレヴィナスにしても、「感じるものと感じられるものの共同体」が「同一の客観的内容」によって媒介されるとは想定していないし、「単一の意識にまで」単純化されるとも考えていない。ここではむしろ、「あたかも一つの同じ感情が実質的に私と他者と共に共通しているかのように、感じられるものの中で感じるものが明確になる」（297）。してみると、感じることの同一性は「あたかも～のように（comme si）」によって仮構された想像的同一性のように見えてくる。いずれにせよ、エロスの主体である「感じるもの」が「感じられるもの」の中で示されるのだとすれば、そうした重ね合わせの実際の様式がいかなるものであるかを問わねばならない。レヴィナスはすぐ後でこの官能の構造を「愛への愛（amour de l'amour）」（297）という言葉で表現している。「私が十全に愛するのは、他人が私を愛する場合のみである。それは、〈他人〉からの承認が私に必要だからではなく、私の官能が〈他人〉の官能を享樂するからである」（298）。官能が目指しているのは、他人そのものではなく、他人の官能である。それゆえ官能とは「他者の官能への官能、他者の愛への愛」（298）なのである（このあまりにもコジューブ・ラカン的な定式に注目されたい）。相手が感じる官能的な喜びに対して官能的な喜びを感じ、相手からの愛を愛すること、そしてその中に自らの満足を見いだすこと——こうした二元的自足の構造こそ、レヴィナスが「同一性」という言葉で示したかった事態なのだろう。

ところが、アンリ現象学の立場から見ると、この同一性はアポリアを抱えている。そもそも私は他者の愛や官能といったものをどのように感じ取ることができるのか。私によって享樂されるという「他者の官能」が、他者の実在的な官能体験であるとはかぎらない。これは、アンリがエロスの関係における「フェイントの可能性」として提示していた問題である²⁵。「他者が（私の行為によって）快を感じている」という私の感覚それ自体は、必ずしも他者の実質的快を必要としない。こ

²⁵ 「この限界経験のまさに只中で（……）フェイントの可能性が残っている。どれほど多くの女たちが、その身を任せている男に、愛やその他の理由から、自分が体験していないような、おそらくは一度も体験したことのないような快楽をその男から得ていると信じさせたことか。」（M. Henry, *Incarnation, op. cit.*, pp. 302-303.）

の意味でも官能的二元の同一性は、孤立した快樂の側面——レヴィナスの用語で言えば「欲求」の特性——を強固に保持している。事実、レヴィナスは「愛への愛」について次のようにも語っている。「もしも愛することが、〈愛される女〉が私にもたらす愛を愛することであるとすれば、愛することはまた愛の中で自らを愛すること (s'aimer) でもあり、そうすることで自己に戻ることである」(298)。恋人たちの共同体は「二人きりのエゴイズム」であって、そこに充足するだけであれば、自己からの解放も実現しない。ならば、この二元的同一性は自我を再び自己に閉じ込めてしまうのではないか。アンリはそれに近い状態をいみじくも「自己色情 (auto-érotisme) ²⁶」と呼んでいた。

とはいえ、レヴィナスによれば、この共同体にも「ある曖昧さ」(304) が働いている。「エロスの愛」は、たしかに他のさまざまな快樂に比するものであるが、同時にまた「あらゆる快樂の彼方」(304) に位置づけられる。性愛が快樂の中にありながらも快樂を超えてゆく契機、別の言い方をすれば、愛が自足の中であって自己から離れてゆく契機がなくてはならない。もしもそうしたものがあるとすれば、それはやはり「子」の契機以外にないだろう。愛への愛、官能への官能という同一化のうちにあっても〈同者〉と〈他者〉は「一つになることなく」、「子を産む」(298)。「共通項が関係の諸項より後にあるという事実」、つまり「息子」という「支え (support)」がエロスの関係の後から出てくること、そこに「逃走という出来事の唯一の存在論的可能性」がある ²⁷。官能的二元の「同一性」が引き起こすアポリアを乗り越え、その同一性を「自己への回帰」とは別の仕方では保証するもの、それが子と呼ばれるものとの関係——「父性」なのである。

おわりに

以上の分析では結局、『全体性と無限』の枠内で生殖なきエロスを論じることがいかに難しいかを確認してきたにすぎない。レヴィナスのようにエロスを生殖との「分離不可能性 ²⁸」において論じる態度は、旧弊な考えのようにも見えて、ある新鮮さをもっている。たとえば『存在と無』の J = P・サルトルは、他者存在との

²⁶ Cf. M. Henry, *Incarnation, op. cit.*, p. 303.

²⁷ Cf. E. Levinas, *Œuvres 2, op. cit.*, p. 98.

²⁸ J.-L. Thaysse, *op. cit.*, p. 305.

相剋を議論のベースとしたため、エロスの関係を悲観的に捉える傾向が強かった。『存在と無』における「欲望」は、それが我有化の欲望であるかぎり、「挫折」を余儀なくされている²⁹。「サルトルに抗して³⁰」セクシュアリティの問題を論じようとしたアンリでさえ、背景にある理論構成は大きく異なっても、「欲望の挫折」というサルトル的テーゼを放棄することはなかった。しかも、アンリの場合には、内在次元における「生ける肉」同士の邂逅それ自体が、性愛全般に対するペシミズムへの入り口となっている。こうした方向性にレヴィナスの議論を対置してみれば、その異質さは明らかだろう。彼のエロス論が随所で官能的二元の「悲壮さ」を強調しながらもペシミズムに陥らないのは、それが他者の所有可能性を初めから除外しているからというだけの理由ではない。それ以上に、最終局面で繁殖による存在の多元化、時間の無限化が展望されていることの方が大きい。

このような理論上の隔たりは、キリスト教徒たちが「旧約聖書」と呼ぶユダヤ教聖書と、キリスト教固有の聖典である「新約聖書」との間にある基本的な相違点を思い起こさせる³¹。かつてJ・タウベスが指摘したように³²、旧約と新約との決定的な断絶は「あるライトモチーフの有無」において顕著である。前者の世界では、サラ、リベカ、ラケル、ハンナといった女性たちが次々と不妊に悩み、わが子の誕生を神に乞い求める。これを受けて神は望みどおり彼女たちに子を授ける。なるほど、新約においても『ルカによる福音書』のようなテキストの冒頭が、洗礼者ヨハネの誕生物語を介して、まったく同じ筋書きを反復している。ところが、これは例外でしかない。「キリスト〔救世主〕」とされるイエスが登場して以降、このモチーフはまったく消滅してしまうのである。神の子キリストはその力によって、多くの病人を癒し、5000人の群衆の腹を満たし、海上を歩行し、盲人の目を見えるようにし、死者をも復活させることができた。ところが、ここにはあたかも意図された

²⁹ Cf. Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, édition corrigée par A. Elkaim-Sartre, « Collection Tel », Paris: Gallimard, 1976, pp. 437-438.

³⁰ Michel Henry, « Notes sur l'expérience d'autrui », [Ms A 5-6-2850] in *Revue internationale Michel Henry*, No. 2, Presses universitaires de Louvain, 2010, p. 80.

³¹ 以下の記述は下記拙稿での分析に依拠している。伊原木大祐「父性という虚構——レヴィナスの世代論について」『人文知の新たな総合に向けて——21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」』（第五回報告書・上巻）、2007年、115-139頁。

³² Vgl. Jacob Taubes, *Die Politische Theologie des Paulus*, München: Wilhelm Fink Verlag, 2003, S. 82f.

かのように、一つの奇跡物語が欠けている。それは「旧約」で繰り返された、不妊の女性に子を与えるという奇跡である。後の世代の使徒パウロに至っては、婚姻という出来事さえもが副次的なものとなす（『コリント人の手紙』第七章）。パウロが書簡の中で語る「出産」や「子」はすべて霊性の象徴であり、精神に関わる比喩的表現としてしか意味をなさない（『ガラテヤ人への手紙』第四章）。

ただし、レヴィナスにおける生殖のテーマは、厳密を期して言うならば、二重の意味でユダヤ的である。一方でそれは明らかに、実体的な出産や繁殖に重きを置くユダヤ教聖書の伝統に忠実である。やはりレヴィナスと同じくハイデガーに多くを学んだユダヤ人哲学者ハンス・ヨナスが、独自の倫理学説を構築する際に依拠したのも、ちょうどこの伝統であった。その代表作『責任という原理』（1979）は、未来倫理にふさわしい定言命法として「人類を在らしめよ」を第一に掲げる。この存在論的な義務は将来の人類の生存に対する義務を表示しており、その中には（必ずしも個人には課せられないという）生殖への義務が含まれるという³³。レヴィナスの場合、そこまで議論を拡張することはないが、それでも生殖のうちにある種の未来との関係——救済論的倫理の可能性——を予感している点においては、非常によく似た視点をもっている。ヨナスがその学問的キャリアを本格的なグノーシス研究者としてスタートさせながら、結局はグノーシス主義に抗するような倫理的・哲学的価値観を主張するに至った点を考えあわせると、この類似は意義深い。いずれにせよ、セクシュアリティ全般に対する教父的な価値観に侵されたアンリのような哲学者が、この内的でもあれば外的でもある第三項の産出の意義に注意を払わなかったこととは対照的である³⁴。しかし他方、レヴィナス自身が力説している（277, 310, 343を参照）ように、彼のいう生殖は生物学的・経験的なレベルに収まる概念ではない。その方向性は、生殖、父性、子性、さらには兄弟性の問題を血縁の生物学的レベルから解放して、独特な精神的結合の様式として再理解する可能性へと開

³³ Vgl. Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, 1984, S. 86-92, 186-187.

³⁴ このテーマをめぐるアンリとレヴィナスの分節化については、永井晋『現象学の転回——「顕現しないもの」に向けて』、知泉書館、2007年、45-48頁参照。ただし、アンリ以上に「カトリック」的な立場を保持しているとも考えられる哲学者J=L・マリオンが、その現象学的エロス論の中で「子」という第三者の到来について分析している点を無視すべきではないだろう。Cf. Jean-Luc Marion, *Le Phénomène érotique. Six méditations*, Paris: Le livre de poche, 2004, pp. 326ff.

かれている。つまり、肉体間の繋がりを欠いたところで父子性や兄弟性を論じる余地が残されている³⁵。このようにレヴィナスのテキストそのものを隠喩的なものとして、いわばミドラシユ的に解釈することへと促している点でも、エロスのテーマはなおユダヤ的であると言えよう（かつてユダヤ教の律法学者であったサウロ＝パウロがなおも「ユダヤ的」であるというのと同じような意味で）。けれども、そうした読解の徹底は、生殖と緊密な関係にあったエロスの議論から肉的な基盤を削ぎ落としてゆくという、それなりに深刻なデメリットがある。「エロスなき愛」が重視され、愛撫までもがエロスを欠いた「近さ」の概念へと昇華されていく後期レヴィナスの思想³⁶を顧みるならば、前期のエロス論における字義通りの内容にも容易には捨て去りがたい価値があるはずである。

文献表

【外国語文献】

- G rard Bensussan, « F condit  d'Eros.  quivoque et dualit  », in *Lire Totalit  et Infini d'Emmanuel Levinas.  tudes et interpr tations*, Paris: Hermann, 2011.
- Catherine Chalier, *Figures du f minin. Lecture d'Emmanuel Levinas*, Paris: Des femmes-Antoinette Fouque, 2006.
- Jacques Derrida, *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Paris: Galil e, 2000.
- Michel Henry, *C'est moi la v rit . Pour une philosophie du christianisme*, Paris: Seuil, 1996.
- , *Incarnation. Une philosophie de la chair*, Paris: Seuil, 2000.
- , *Ph nom nologie mat rielle*, Paris: PUF, 1990.
- , « Notes sur l'exp rience d'autrui », [Ms A 5-6-2850] in *Revue internationale Michel Henry*, No. 2 – 2011, Presses universitaires de Louvain, 2010.

³⁵ 「生物学的に子であること (filialit ) は、子であることの最初の形にすぎません。しかし、子であることは、生物学的な親子の絆を欠いた人間同士の関係として、十分に考えることができます。他人に対して父親のような態度を取ることができるのです。」(E. Levinas, * thique et infini. Dialogues avec Philippe Nemo*, Paris: Fayard et Radio-France, 1982, pp. 73-74)。

³⁶ 「エロスなき愛」については、『観念に到来する神について』所収の論文「神と哲学」を参照 (E. Levinas, *De Dieu qui vient   l'id e*, Paris: Vrin, 1992, p.113)。その論文では、「私の責任」が「すぐれてエロスのでないもの」(*ibid.*, p. 115) とされている。愛撫と近さを同質化する記述については、以下の各所に見られる。Cf. E. Levinas, *En d couvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Paris: Vrin, 1967, pp. 227, 230; *Autrement qu' tre ou au-del  de l'essence* [1974], Paris: Le livre de poche, 1996, pp. 144, 150.

- Dominique Janicaud, *Le tournant théologique de la phénoménologie française*, Paris: L'Éclat, 1990.
- Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1984.
- Emmanuel Levinas, *Le temps et l'autre*, Paris: Quadrige/PUF, 1998.
- , *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, Paris: Le livre de poche, 1996.
- , *Éthique et infini. Dialogues avec Philippe Nemo*, Paris: Fayard et Radio-France, 1982.
- , *De Dieu qui vient à l'idée*, Paris: Vrin, 1992.
- , *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Paris: Vrin, 1967.
- , *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* [1974], Paris: Le livre de poche, 1996.
- , *Œuvres 1: Carnets de captivité et autres inédits*, Paris: Grasset / IMEC, 2009.
- , *Œuvres 2: Parole et Silence et autres conférences inédits au Collège philosophique*, Paris: Grasset / IMEC, 2011.
- Jean-Luc Marion, *Le Phénomène érotique. Six méditations*, Paris: Le livre de poche, 2004.
- Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, édition corrigée par A. Elkaim-Sartre, « Collection Tel », Paris: Gallimard, 1976.
- Alexander Schnell, *En face de l'extériorité. Levinas et la question de la subjectivité*, Paris: Vrin, 2010.
- Jacob Taubes, *Die Politische Theologie des Paulus*, München: Wilhelm Fink Verlag, 2003.
- Jean-Luc Thaysse, *Eros und fécondité chez le jeune Levinas*, Paris: L'Harmattan, 1998.

【日本語文献】

- 伊原木大祐「父性という虚構——レヴィナスの世代論について」『人文知の新たな総合に向けて——21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」』（第五回報告書・上巻）、2007年、115-139頁。
- 小泉義之『レヴィナス——何のために生きるのか』、NHK出版、2003年。
- 小手川正二郎『甦るレヴィナス——『全体性と無限』読解』、水声社、2015年。
- 檜垣立哉『子供の哲学——産まれるものとしての身体』、講談社選書メチエ、2012年。
- ジャン＝ミシェル・サルランスキ『『全体性と無限』の諸地平』『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』（合田正人編）、知泉書館、2014年、3-31頁。
- 永井晋『現象学の転回——「顕現しないもの」に向けて』、知泉書館、2007年。